

## 梅月堂『金鰲新話』の和刻本

——板本の特質と成立時期——

はじめに

日本江戸期は出版文化の飛躍的な発展が見られた時代といえる。なかでも〈和刻本〉という日本独自の出版文化は、その典型の一つとして注目される。和刻本とは、「日本で出版された版本をいうが、唐本や朝鮮本に対し、それらの本を日本で再製作した版本の漢籍を指すのが一般的である。」<sup>①</sup>と定義される。

ところで、朝鮮王朝時代一五世紀を生きた梅月堂・金時習（一四三三—一四九三）が著した漢文伝奇小説『金鰲新話』<sup>クワモレンナ</sup>も、江戸初めに和刻本として出版されていた。

では、和刻本『金鰲新話』は、いつ頃、誰によって、どのように板行されたのであろうか。筆者はこの問題に関心をもって調査し、『金鰲新話』の和刻本が八本伝存することをひとまず紹介した。<sup>②</sup>そ

邊 恩 田

して、和刻本が京都の地で開板されていたこと、その底本となったのは、医師曲直瀬正琳（養安院）<sup>まなせしやうりん</sup>が所蔵していた朝鮮本の『金鰲新話』（尹春年編輯・中国大連図書館現蔵）であったと考えてよいことと、曲直瀬正琳がいかにして所蔵するに至ったかその伝来と所蔵の経緯についても考察した。<sup>③</sup>

またその後も続けた調査によって、八本の資料と書誌についての報告をしたのであるが、本稿では、そこで詳述し得なかつた重要な知見を述べ、いまだ論議されていない伝本の成立時期と先後関係という問題について考察を加えるものである。

### 一 和刻本『金鰲新話』の書誌的特質

『金鰲新話』の現存する和刻本は次の通りであった。<sup>④</sup> 刊記によって大きく3つに分けられた。

表1・伝本別対比表

	1. 承応二年刊記本	2. 万治三年刊記本	3. 寛文十三年刊記本
	① 国立公文書館内閣文庫蔵本	① 京都大学文学研究科図書室蔵本 ② 京都大学附属図書館蔵本 ③ 早稲田大学図書館蔵本 ④ 大連図書館蔵本	① 京都大学文学研究科図書室蔵本 ② 天理図書館蔵本 ③ ハーバード大学燕京図書館蔵本
外題	金鰲新話	梅月堂金鰲新話 全	金鰲新話 全
題箋	なし(直書き)	あり(刷り題箋)	あり(刷り題箋)
角書	なし	なし	なし
冊数	...	...	...
綴じ方	五つ目綴じ	五つ目綴じ	五つ目綴じ
表紙色	薄茶色	縹色	濃藍色
刊記	承応二年仲春 崑山館道可處士刊行	飯田忠兵衛新刊	萬治三曆仲夏吉且 萬治三曆仲夏吉且 寛文十三卅年仲春 福森兵左衛門板行

1. 承応二年刊記本 ① 国立公文書館内閣文庫蔵本
2. 万治三年刊記本 ① 京都大学文学研究科図書室蔵本  
② 京都大学附属図書館蔵本  
③ 早稲田大学図書館蔵本  
④ 大連図書館蔵本 (在中国)
3. 寛文十三年刊記本 ① 京都大学文学研究科図書室蔵本  
② 天理図書館蔵本  
③ ハーバード大学燕京図書館蔵本
- (在美国)
- ①本の場合も、題箋は剝がれ落ちたと見てよいが、原題箋のタイト
- 前稿<sup>①</sup>で報告した書誌的事項のうち、主たる項目について対比したのが表1である。表には挙げないが、内題「梅月堂金鰲新話」と尾題「梅金鰲新話」は八本に共通する。以下、項目別に見ていく。
- (右掲番号1〜3①〜④を伝本の略号としても用いる)
- (1) 外題・題箋・角書「調點」
- 外題のうち、表紙に直書きした「書き外題」であるのが1①と3①であり、書名の「金鰲新話」だけを墨で手書きしている。題箋が貼られるようになったのは寛永の頃であるので、承応二年刊記の1

ルがどうであったかについては不明である。

これ以外の伝本はすべて、題簽を貼った貼り外題である。その外題には、金時習の号「梅月堂」を書名に冠し「梅月堂金鰲新話」とする②・②③・②④があり、これは内題と同じもの。そして訓点  
が誰によるかを説明する角書<sup>つが</sup>「<sup>道春</sup>調点」を書名に冠したのが、②①と③②・③③である。

角書のうち、「<sup>道春</sup>調点」は言うまでもなく林羅山（一五八三—一六五七）による訓点を指し、寛文十三年刊記本③の②天理図書館蔵本と、③ハーバード大学燕京図書館蔵本にあることは以前より影印本によって知られていたのだが、寛文より遡る方治三年刊記をもつ②①京都大学文学研究科図書室（頼原文庫）蔵本にもあることを、筆者は前稿で報告した。これは羅山訓点の是非問題を考える資料ともなり重要である。

ところが、先にふれたように最も古い①本に、「<sup>道春</sup>調点」の角書は書かれていない。後筆による外題であるので、その際省略したとも考えられるものの、「<sup>道春</sup>調点」の角書が開板当初より外題にあったかどうかは疑わしくなろう。

そしてまた、羅山による訓点かどうかを確定することも、今の段階ではなお問題が残る。このことは前稿でも触れたが、「外題というのは著者の考えというより、板元の商業的な事情でつけられたも

のが多いようである」という指摘があり、やはり羅山の名を借りての「売らんかなという板元の意図があつてこれを付したのであろうか」と思われる。

## （2）冊数

諸本みな一冊本である。ところが奇妙なことに、外題に「全」の字を記した伝本がある。②①と②②と③①である。最初から一冊本として販売していたならわざわざ「全」を示すことはないわけだが、その必要があつたらしい。「全」の語意からすれば、分冊で装丁し売られていたものを全て揃えた、という意味になる。

はたして、江戸期の書籍目録のうち、『増益書籍目録』元禄九年（一六九六）版及びこれ以降のものには、『金鰲新話』欄に、冊数を「一」とする。ところがそれ以前の書籍目録類、たとえば寛文六年頃刊『<sup>和</sup>漢書籍目録』や延宝三年刊『<sup>古</sup>書籍題林』など数種には「二」とあつて、二冊本で売られていたことが知られる。

つまり江戸初期に、『金鰲新話』の和刻本はもとも二冊本で作り売られていたが、のち合本されて「全」字が追記されることになったということになる。

さらにこの事実を傍証するのが③①本で、前表紙の右下に「坤」の字がある。これは「乾坤」の「坤」であつて、上下二冊のうちの「下」をさす語である。してみれば、③①本も元は二冊本であつて、

一冊に合本される際、下巻の表紙の方が使われたものと察せられることになる。冊数の変遷に板行と販売の事情がうかがい知られよう。

### (3) 綴じ方・表紙の色

装丁は、五つ目綴じ（唐本では五針限釘法）がほとんどである。ところが唯一、2③の早稲田大学図書館蔵本だけが「四つ目綴じ」になっていて注目される。こちらの方が和本を代表する綴じ方といえるが、五つ目綴じは朝鮮本に独特な装丁法であって、朝鮮印刷技術とともに受け入れたものであった。この2③本が四つ目綴じであることの意味は、板本の先後関係とからめて後で述べる。

次に表紙の色であるが、表1に見るようにさまざまであるのは、異なる時期に、異なる板元から、数度にわたり刷られたという事情を示唆するといえよう。色の違いから先後関係は読みとれるのであるのか。栗皮色や縹色は江戸初期に多い色といわれ、2①本や2②本がより古いものと考えられる。時代の流行による色の变化、板元による使い分けといった何らかの事情があるのではないかと思われるが、いま筆者に江戸板本全体にわたる知識はなく今後の課題となる。

## 二 刊記の変遷と万治三年刊記本の特徴

さて、本の顔ともいえる外題とともに、本が誰によって出されたかを教えるのが刊記である。巻末に刊年、書肆名を記したものであ

るが、表1に示したように、和刻本『金鑿新話』の刊記には四つのパターンがあることがわかった。

このうち、万治三年刊記をもつ伝本に二系統があることを、すでに指摘していたが、それは本文の誤刻字から判明したことであった。すなわち、2の①②本（左にあげるB）は、22丁裏9行「晴嵐欲雨」の「嵐」字を正しく「嵐」に刻していて、これは底本の朝鮮本『金鑿新話』の通りであるが、2の③④本（左にあげるC）では、「嵐」字を「風」字に誤刻していた。

このことから結論として、「風」の字を刻した「飯田忠兵衛新刊」の板元刊記を有する方が先の印行であって、「風」字を刻し板元名を削去した方は後年に刷られた後印本<sup>⑩</sup>、という事実が明らかとなっていた。

よって、四種の刊記（仮にA B C Dを付す）は、A ↓ B ↓ C ↓ D という移り変わりになることが知られたわけである。（刊記の図版は前稿（注④）にあげたものを参照されたい）

承應二年仲春

崑山館道可處士刊行

…1の①本 ……A

萬治三曆仲夏吉旦

飯田忠兵衛新刊

…2の①②本 ……B

←

萬治三曆仲夏吉且

…2の③④本…C ←

萬治三曆仲夏吉且

寛文十三丑年仲春

…3の①②③本…D ←

福森兵左衛門板行

承応二年刊記本1の①本は、刊年と板元名（崑山館道可處士）を本記によって表していたが（A）、万治三年刊記本の2①②本では

このAをすべて削り取り、新たに刊記と板元名「飯田忠兵衛新刊」を埋木によって入れてある（B）。その後また板木の移動があり、

〔Bから板元名だけ削られて、板元名が無のまま刷られることになり（C）、さらにその後Cの板木を手に入れた福森兵左衛門は、Cをそのまま残して、後表紙見返しに奥付を設け、刊年と自身の板元名を刷って販売したのがDとなる。

このように刊記の変遷が知られたが、渡辺守邦氏は「板本の刊記が現行の活版本の奥付とは違って、はるか後年までそのまま削られることもなく通用する慣行にあつたらしい」と指摘されており、和刻本『金鰲新話』の場合にもそれがあてはまる。板木の移動による刊記の移り変わりである。今後もし和刻本『金鰲新話』の新出本があれば、まずはこの四種の刊記と対比すべきことになる。

ところで、C系統本に誤刻字が発生したのは、21丁から24丁までの部分が新たに覆刻されたからであった。この丁は新しい板木に彫られたものであった。「風」の誤刻字があるだけでなく、字体がさまざまに異っているのはこのためであつて、特に日に付く字をいくつか挙げるなら

21丁表の「望」、21丁裏の「返」「三」「齊」「然」、22丁裏の「飯」「練」、23丁表の「漁」「虚」、24丁表の「清香」「游泳」、24裏の「江」「釵」「梧」

などがある。

さらに、字体が異なるだけでなく匡郭の大きさにも相違があつた。21丁から24丁の部分は、前後の丁に比べ匡郭の寸法が大きい。ことに縦寸が著しく、目視でもわかるほどであつた。覆刻の際に板木が変わつたからである。

以上述べてきたことから、万治三年刊記の四つの伝本①②③④を、まとめて論じることができない。B刊記の①②と、C刊記の③④に分けて取り扱うべきことになる。寛文十三年刊記本のDについては、万治三年刊記本のうちCの方と同板と見てさしつかえない。DではCに奥付が加わつただけである。これまで注意が払われなかつたが、今後は、右に示した二系統に留意し、比較・校合すべきである。

### 三 版面の比較

#### ——板本の先後関係——

さて、以上見てきたように、万治三年刊記本の特異性が明らかとなった今、次に考えるべき問題は、万治三年刊記本のうち後印本である③④は、はたして寛文十三年刊記をもつ①②③本よりも以前に刷られた本だろうか、という問題である。

というのも、万治三年刊記をもつからといって、その刊記の年（万治三年）に刷られた本とは必ずしも言えないからである。承応二年刊記の本、寛文十三年刊記の本、しかりである。

刊記の年は、必ずしも印出された年にはならない。それは「刊記がそのまま摺刷時を意味しない」<sup>③</sup>からである。同一の板木を使って何度もくり返し刷って売られるのが板本であって、「同一板木を使いながら、摺刷時を異にする」<sup>④</sup>という特質をわきまえた上で、板本の成立年や先後関係を判断しなければならないのである。

では、これまで見てきた和刻本『金鰲新話』の八伝本の、先後関係はどう判断できるのだろうか。その判定ははたして可能であろうか。この問題を解くには、紙面に注目し、版心、魚尾、文字、匡郭などいろいろな点を見比べることが重要である。板の先後を判定する有効な方法は「匡郭や覆線の切れ目を比較する方法」<sup>⑤</sup>である。筆

者は、和刻本『金鰲新話』の版面の特徴と板木に現れた欠損の進行状況を手がかりにして、この問題に迫ってみたい。

#### (一) 匡郭の切れ目・欠損

そこで、すべての丁にわたって各伝本の版面を、原本に当たり調査対比した。文字と匡郭について、この作業を進めたが、文字の場合、虫食いのため切れや欠けができていたり、また墨付きの濃淡のため不明であったりで、すべての伝本にわたり対比可能な事例を得るのがたやすくはない。

しかし、匡郭の切れ目の調査からは、きわめて貴重なデータを得ることができた。数ある事例の中から、全伝本に涉つて対比が可能で、なおかつ明確で、良好な事例を探し出した。

その結果、意外にも、最も多くの箇所において匡郭の切れ目を見た伝本が、万治三年刊記の②③早稲田大学図書館蔵本であることが知られた。刮目すべきことであり、後述する。

このように調査した結果をまとめたのが、表2である。同一箇所について、各本に、その有無を示した。

調査の結果わかったことを、次にまとめる。

「1」現伝最古の伝本である1①国立公文書館内閣文庫蔵本において、すでに匡郭の欠損が見られた。それは五箇所に及んでいた。6丁裏左、17丁表右、18丁裏上、32丁裏左、42丁裏左である。(図1)

表2 匡郭の切れ目・欠損の有無対比表

丁数表裏・ 匡郭の場所	1 承応二年 刊記本			2 万治三年刊記本			3 寛文十三年刊記本			
	①内閣 文庫	①京大 文図	②京大 附図	③早稲 田図	①京大 文図	②天理 図	③ハ燕 京図	①京大 文図	②天理 図	③ハ燕 京図
2丁裏・右	なし	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○
3丁表・右	なし	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○
6丁裏・左	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8丁表・右	なし	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○
8丁裏・左	なし	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○
12丁裏・左	なし	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○
14丁表・右	なし	○	なし	○	○	○	○	○	○	○
15丁裏・左	なし	○	なし	○	○	○	○	○	○	○
17丁表・右	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18丁裏・上	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
32丁裏・左	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39丁表・上	なし	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○
42丁表・右	なし	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○
42丁裏・左	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
43丁裏・上	なし	なし	なし	○	○	○	○	○	○	○
45丁表・右	なし	なし	なし	◎	○	○	○	○	○	○

○印は切れ目・欠損が有ること、◎はそれが増大していることを表す。

この事実によって、1①本が初印本（初刷り本）と言うことはできなくなった。そればかりか、刊記の承応二（一六五三）年よりも後の時期に刷られた可能性が、出てくることになる。この可能性は高いと思われる。

これは推測になるが、承応二年以前に『金鰲新話』の板木は作られていて、前掲Aの刊記とは異なる版があったのではないかと考えられ、その可能性は否定できない。あるいは、刊記そのものが無いまま印出されることがあったが、承応二年に、崑山館道可處士が刊記を入れて刷った本が、この内閣文庫蔵本として残った可能性もあるのではないだろうか。

〔2〕2の③早稲田大学図書館蔵本にだけ見られ、他伝本に全くない欠損が、六箇所にあった。2丁裏右、3丁表右、8丁表右、8丁裏左、12丁裏左、39丁表上である。

この六例は、奇妙なことに、万治三年（一六六〇）刊記の2③本に有る欠損が、それより後の刊記である寛文十三年（一六七三）刊記の3①②③本の方には無い、ということになり、年代上齟齬が起ることになる。

また45丁表右の場合、寛文十三年刊記本の三伝本より欠損が大きくなっているのである。

この事例をもって、2の③本は、万治三年刊記の本ではあるもの

の、実際には寛文十三年刊記の3①や②や③よりも、かなり後年に刷られた後印本だという事実が、判明する。

言いかえるなら、早稲田大学図書館蔵本は、現伝する和刻本の申では、最も後年に刷られた板本だという結論に至るわけである。<sup>⑩</sup>

〔3〕1①国立公文書館内閣文庫蔵本に有った欠損が、しだいに増えて、2③早稲田大学図書館蔵本において最も大きくなっている事例が一つある。17丁表右である。(図2参照)

まず大きい欠損が匡郭の右下にある。これは後の各本ともに有る。しかし1①にはなかった欠損(一行目「人扶」字の右方)が、他本には生じていて、さらにこの欠損が2③本ではより大きくなっている。加えて新しい欠損(一行目「花鉗」字の右方、及び匡郭右上角の二箇所)が、2③本にだけ増えているのである。

この事実は、右の「2」で指摘したように、万治刊記の2③早稲田大学図書館蔵本が寛文刊記の3①②③よりも後の刷りであることを、いま一度証明してくれる。欠損が順次大きくなる様子が、図版の各本の対比から確認できよう。今回の調査で得た最も典型となる好箇の貴重な資料である。

以上「2」「3」を通して、早稲田大学図書館蔵本がもつ諸本の中での特異性が知られ、先後関係での位置が判明したことになる。そしてここに至って、早稲田大学図書館蔵本が唯一、先に言及した

「四つ目綴じ」であったことが思い起こされ、四つ目綴じが和本に多く後出の綴じ方であることと辻褃が合うわけである。

#### 注

① 井上宗雄・岡雅彦・尾崎宗・片桐洋一・鈴木淳・中野三敏・長谷川強・松野陽一編著『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、一九九九。「和刻本」項。

② 邊恩田「日本江戸時代における『剪燈新話句解』と『金鰲新話』の受容(韓国語文)」の「金鰲新話」及び「剪燈新話」の日本現存本目録」項(高麗大学校民族文化研究院主催国際学術会議、二〇〇一、一〇、二九・三〇)、「民族文化研究」第35号二〇〇一、一一に掲載。「東アジア文学の中における韓国漢文小説研究」図書出版月印、二〇〇二、五に取載。及び「朝鮮刊本『金鰲新話』と林羅山」(『朝鮮文学論叢大谷森繁博士古稀記念』白帝社、二〇〇二、三三)の「『金鰲新話』伝存本日録」項。

③ しかしこの後出た早川智美「『金鰲新話』版本考」(『大谷學報』二〇〇六、一)は、筆者が初めて紹介していた京大本の三本(2①②、3①)をなぜかとりあげず、2③早稲田本のみを万治本とする。(その版本内容は崔溶澈著『金鰲新話の版本』(ソウル)二〇〇三をそのまま用いたもの)

④ 邊恩田「朝鮮刊本『金鰲新話』の出所蔵者養安院と蔵書印」道春訓点和刻本に先行する新出本」「『同志社国文学』第五号、二〇〇一、一一。

⑤ 邊恩田「和刻本『金鰲新話』の諸本」『同志社国文学』第六五号、二〇〇六、一一。



- ⑤ 注④の八一頁。
- ⑥ 橋口侯之介『和本入門』岩波書店、二〇〇五、一一八頁。
- ⑦ 注②「朝鮮刊本『金鰲新話』と林羅山」の九八頁。
- ⑧ 慶應義塾大学斯道文庫編『江戸書林出版書籍目録集成』井上書房、一九六二。及び阿部隆一氏「解題」参照。
- ⑨ 注⑥の一四四頁。なお、江戸時代の板本は「同じ本でも売り出したときに冊数を変えることもよくあった。初刷本ときは1巻1冊だったのに（中略）後刷りや重板のさいには二、三巻を一冊にしてしまうのである。この逆はめつたにない。」という指摘がある。
- ⑩ 中野三敏『書誌学談義』江戸の板本』岩波書店、平成七、九二頁。
- ⑪ 注④の八五、八八頁。
- ⑫ 渡辺守邦「脚注おはえがき」『伽婢子』新日本古典文学大系・岩波書店、二〇〇一、五〇九頁。
- ⑬ 渡辺守邦「古活字版伝説―近世初頭の印刷と出版」日本書誌学大系54・青雲堂書店、一九八七、一六頁。
- ⑭ 注⑬の三二頁。
- ⑮ 注⑩の二、五頁。
- ⑯ 虫損についていえば、たとえば②天理図書館蔵本には虫食いによる活字の欠損がかなりあった。影印本を見る限りでは虫損による欠損・切れ目と紛らわしく見分けがつきにくいのが、実見で確かめられる。
- ⑰ なお④の大連図書館蔵本も③早稲田大学図書館蔵本同様、後印本であるかと筆者は考える（崔溶澈教授より入手の写真から）が、未見であり今回の表に入れていない。調査後追加報告する。

附記・本稿は、二〇〇七年一〇月七日朝鮮学会第58会大会で発表したものを成文化したものである。

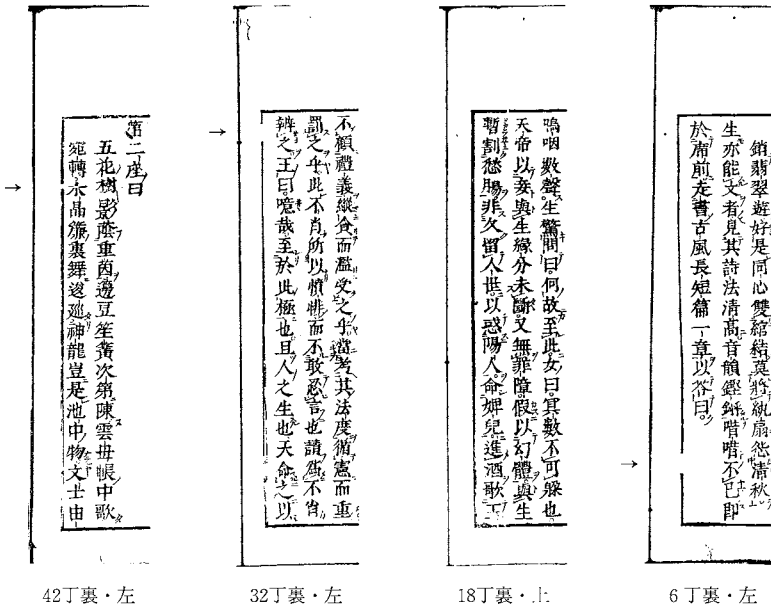


図1 1①国立公文書館内閣文庫蔵本に見られる匡郭の欠損（17丁表・右は、図2に掲出）

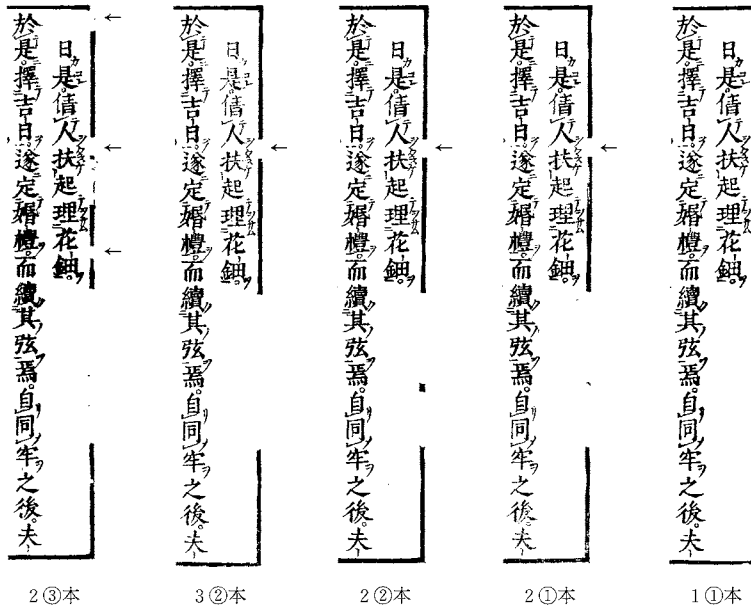


図2 17丁表・右匡郭に見られる欠損。1①本から左方向へ2③本までの増大変化（矢印に注意）  
 （3①③本もほぼ同じ）